

- 1 大単元名 新しい日本の国づくりを見つめよう  
小単元名 二つの戦争と日本・アジア

2 小単元目標

日清・日露戦争の経緯と、その背景にある国際状況を理解し、日本とアジア諸国との関係の変化についてとらえることができるようにする。また、国内の産業や社会の様子の变化もとらえることができるようにする。

- ・ 関心・意欲・態度・・・日清・日露戦争の経過や国内の産業・社会の状況について調べようとする。
- ・ 思考・判断・・・日本が条約改正に成功した理由が、明治の諸改革やアジアでの二度の戦争とどう関わっているのかを考えることができる。
- ・ 技能・表現・・・二つの戦争の経過やその後の社会的な状況、人々の暮らしについて調べることができる。
- ・ 知識・理解・・・二つの戦争と近代産業の発達、民主主義を求める動きの高まりの関連性が分かる。  
国際社会での日本の地位の変化が分かる。

3 ひびき合う子ども達を目指すための指導の工夫

本単元で扱う近代の歴史は、政治や経済の状況、国際関係、社会の変化と、どれをとっても複雑で急速な展開を見せる。そのため、子ども達には理解が困難になる場合があるので、徹底して具体的な事例や資料に基づいた学習展開を心掛けたい。また、近代国家の体制が整い、国際社会の中の地位が向上していった時代であるとともに、その過程で日清・日露戦争に象徴されるように後の時代に続く「戦争の時代」の端緒となっていく。

一方、700年近く続いた「武士による政治」と比べて、今子ども達が生きている社会により直接的に関係しているので、より身近に感じて学習を進められるであろう。戦争の経過や国内の状況（政治・人々の暮らし・産業など）日本と外国との関係などの事実をもとに、子どもや女性、アジアの人々の視点からも人々の願いを考えるようにしたい。

小単元の導入においては、教科書の資料を拡大コピーして提示しながら取り組んできた。提示した資料から、気づきや疑問点を話し合いながら、子どもと共に学習課題を設定し学習展開が継続するように工夫してきた。単元を貫く学習課題の設定は難しいが、学習の節目ごとに教師と子どもで確認しながら次の課題を定めるようにも進めてきた。そして、課題に対する調べ学習の時間を確保し、その後に発表する学習をしている。調べ学習では、教科書・資料集・コスモスでの資料・インターネットでの情報を活用して、ノートにまとめている。しかし、資料を写すだけのもので知識としてはなかなか定着していかないという課題も抱えている。ノートのまとめ方については、大事な点で囲んだり、矢印で流れを表したり、アンダーラインを引くなど指導中し、どこを発表したらよいかを確認させている。さらには、調べた後の感想も付け加えられるようにしてきた。

自分の考えを発表することに苦手な児童が多い中で、日々工夫をしていかなければならないと思っている。友達の発表を自分の調べたことと比べながら聞ける子は少なく、付け足しの発言をする子は限られている。調べたことから自分の考えや感想をノートに書いて、話し合い活動に臨むようにしたい。全体交流をする前に、少人数での意見交換の場を持ち、自信をもって発表できるように助言していきたい。子どものノートを事前に目を通して、子どもが学習の場で活躍できるように、教師の指名による発表も取り混ぜていきたい。話し合いが発表する・聞くだけの活動に終わらず、自分の意見とからめて聞いたり発言したりできることを課題として取り組んでいき、響き合える学級集団を目指していきたい。そして、歴史学習において歴史の事象についての様々な視点からの見方や考え方を持てる子になって欲しいと願っている。

4 単元指導計画（全13時間扱い）

時	学 習 活 動	主な支援・留意点（評価）
	ノルマントン号事件について話し合う。 * 不平等な条約をなんとか変えたい。	・ ノルマントン号事件の資料を提示し、吹き出しに書かせる。

本時

日本は、不平等な条約をどのように改正したのだろう。

(思・判)

日本の条約改正の取り組みを調べる。

(技・表)

条約改正の取り組みについて、調べたことを発表し合う。

(技・表)

- ・ 治外法権の廃止
- ・ 日清戦争で中国(清)に勝ち、国際的に認められた。
- ・ 日露戦争でロシアにも勝ち、日本の国際的な地位がさらに上がった
- ・ 関税自主権の回復
- \* 日本は、50年もかけて不平等条約を改正することができた。

(知・理)

・ 条約改正の大まかな歩みをおさえる。

日本の約改正の歩みについて感想を話し合う。

・ 自分の考えや感想をノートに書かせ話し合いに臨むように支援する

・ 二つの戦争によって日本の国際的な地位が上がったことにも目を向けさせる。

国際的な地位が上がった二つの戦争はどんな戦争だったのだろうか。

日清・日露戦争について調べる。

日清戦争とは、どんな戦争だったのか調べたことを発表しまとめる。

原因  
結果

(技・表)

日露戦争とは、どんな戦争だったのか調べたことを発表しまとめる。

・ 二つの戦争の原因、経過、結果を確認していく中で、様々な立場になって考えさせる。

原因  
結果  
戦争の影響

(関・意)

条約の改正や国際的地位を上げた二つの戦争について考えよう。

(思・判)

二つの戦争の後、日本人々の暮らしや社会の様子は良くなったのだろうか。

(知・理)

人々の暮らしや社会の様子について調べる。

(関・意)

調べたことを発表し合う。	(思・判)
次から昭和時代に入っていくので、政治や人々の暮らしの変化について学習したい。	(技・表)(関・意)(知・理)

5 本時について

(1) 本時目標

日本の条約改正が実現していった感想を交流し合い、二つの戦争についての学習課題を立てる。

(2) 本時展開

学 習 活 動	指導上の支援・留意点 (評価)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">日本の条約改正の実現についての感想を発表し合う。</div> <p>1. 小グループ内で、意見交換をする。</p> <p>2. 全体で感想を発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不平等条約が、改正できて良かった。</li> <li>・ ノルマントン号事件が起こったから、条約を改正することができた。</li> <li>・ ノルマントン号事件で亡くなった人の死が無駄にはならなかった。</li> <li>・ 2人の外務大臣のおかげで今も日本は不平等ではない。</li> <li>・ 外務大臣は、えらい。日本の地位が上がり色々な国と交渉できた。</li> <li>・ 条約改正には、50年もの長い年月がかかって驚いた。</li> <li>・ 50年もの間、人々は苦しみ、様々な人が努力してきたから日本が世界に認められた。</li> <li>・ 政府は、戦争したり長い間交渉したりと、国民のために50年かけて改正してくれたなんてすごい。</li> <li>・ 相当時間がかかって、色々な人に受け継がれてこの現在の日本になったのかな。</li> <li>・ 戦争を2回連続でやるなんて、大変だな。</li> <li>・ 日清、日露戦争で日本の国際的な地位が上がって良かった。</li> <li>・ 日本は、戦争が始まって勝てたの？</li> <li>・ 日本が外国の思い通りにされなくなって良かった。</li> <li>・ 日本は、外国と対等になって良かった。</li> </ul> <p>3. 感想を交流したことから次時の学習課題を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日清と日露戦争について詳しく調べよう</li> <li>・ 戦争を起こした原因は何だろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時に発表し合ったことをもとに書いた感想を確認する。</li> <li>・ 小グループ内で、自分の感想を伝えたり、聞き合ったりする。</li> </ul> <p>(関・意) 自分の感想を分かりやすく発表しようとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大きな声ではっきりと発表するように助言する。</li> <li>・ 友達と同じような感想であっても、自信をもって発表させる。</li> </ul> <p>(知・理) 条約改正の歩みと、日本の国際的地位の変化が分かる。</p>

## 6 実践を終えて

### 子どもと教師で行う授業

単元の指導計画は、学年で統一し「ノルマントン号事件」からの導入とした。教師からの投げかけによる資料から、子どもの気づきや疑問を話し合う活動を通して、学習課題を設定した。教師の与えた教材が子どもの知的好奇心を喚起し、徐々に子どもの主体的な学習展開になるよう努めた。条約改正の歩みについて話し合うことから、「二つの戦争はどんな戦争だったか」という新たな課題の設定ができた。学習課題の設定 追究（個人の調べ学習） 発表（伝え合い・ひび気合い） 新たな課題という単元の学習展開を計画し、子どもと共に創る授業を心掛けた。

子ども達は課題に対しての調べ学習では、ノートにしっかりとまとめることができた。話し合い活動において、子ども達の発表が苦手という実態がある中で、話し合う前に自分の考えを書くことで自分の考えを持つことに取り組んだ。小グループでの伝え合いをした後に、全体交流へと段階を踏んだ。しかし、調べたことの発表の段階となると、子ども同士の関わり合いは少なく、教師による意図的指名がどうしても多くなってしまった。子どもは自分の書いてあることは言えるが、友達から知らないことを言われても、何も言えない。教師が、特定の感想からみんなで考える場を設定し、話し合うことが必要だった。意見交流の後、もう一度自分の考えを見つめ直す場を設定し、ノートに書く活動を取り入れたことは良かったし、子どもの変容を見取る資料となった。

響き合う集団を築くには、日常の教科学習での「話す・聞く・伝え合う」活動を積み重ねていくことが大切といえる。そして、教科指導ではお互いを認め合う集団を作っていく学級経営を基盤に置くことが必要といえる。